東洋英和女学院 学院報
TOYO EIWA JOGAKUIN
PUBLIC RELATIONS REPORT
2016.01.29
No.79

# 楓園

ふうえん

## 特集 戦時下の東洋永和

追悼　水澤 郁夫 理事長 ● 5
NEWS　学院／大学・大学院／中高部／小学部
東洋英和幼稚園／大学付属 かえで幼稚園 ● 6
この人に聞く　入野 禮子 ● 13
聖書の言葉／訃報／史料室レター／TOYO Wa-Wa ● 14
英和星空探訪／同窓会／後援会／お知らせ ● 15

学校工場にて勤労動員（1945年3月卒業生卒業アルバムより）
1944年7月から高等女学科の3年生以上は、学徒勤労動員として学校工場あるいは都内の工場に出勤しました

東洋英和女学院
http://www.toyoeiwa.ac.jp

特集

# 戦時下の東洋永和

「平和を実現する人々は、幸いである、
その人たちは神の子と呼ばれる。」
マタイによる福音書　五章九節

1945 年 7 月 24 日　東洋永和女学校教職員記念撮影
1 列目左端：長野彌校長（1947 年～ 1972 年 院長）、1 列目右端：光明照子教諭（1976 年～ 1985 年 院長）

昨年は第二次世界大戦が終了してから七〇年の節目の年でした。
今号の特集では、校名を「東洋永和」と改称していた当時の様子を、写真や手記からお伝えします。

## 戦時下を生かされて

院長　深町　正信

私の生まれ育った時代は、二・二六事件（一九三六年）が起こり、軍部の独裁化が進み、第二次世界大戦に突入したときです。父は日本メソジスト教会の牧師でよく転任があり、幼少期は静岡、東京、長野で育ちました。そして一九四五年の敗戦直前に、父が静岡市の中心部にあった静岡教会の牧師として赴任して、大空襲に遭遇しました。カナダ・メソジスト教会により創立された静岡教会の立派な赤レンガ造りの素敵な会堂も牧師館も焼け落ちる中、私たちは命からがら逃げ回り奇跡的に助かりました。

そのB29爆撃機による大空襲で、静岡市の中心部とその周辺はいわゆる絨毯爆撃を受けました。防空壕から出る時、あたりの町全体は激しい炎に包まれ、熱風が吹き上げており、向かいの駿府城跡の土手にあった見事な松の生樹がメラメラと燃え上がっていました。隣のご家族全員をはじめ、多くの人々がこの大空襲で焼死しました。ところで、戦時下には、東洋英和女学校の校名が「永和」と改名を要求されたように、「英」の文字まで敵視され、英語は敵性外国語として禁じられていました。やがて長崎と広島に原子爆弾を落とされ、日本は無条件降伏し、連合国軍に占領、進駐されました。

戦後、私たちは食糧難とひもじさを経験し、昼時に脱脂粉乳のミルクと一握りの大豆を口にしたときは非常に嬉しく思いました。焼け野原にバラックの家が建ち、闇市ができ、徐々に生活も落ち着いていきました。同時に、学校が再開され、粗末な紙の貧しい教科書を手にすることができました。しかし蚤や虱を退治するため、学校で白いDDTの粉を噴霧器で全身にかけられたことは一生涯忘れられない出来事でした。

私は真の平和な世界の実現を心から願って、常に祈り、真剣に生きるものでありたいと願うものです。

静岡教会焼け跡にて（1945 年、左端：深町院長）

# 写真で見る戦時下の東洋永和の歩み

1934年 5月

財団法人 東洋英和女学校の設立が認可される（創立50周年の年）

1934年 宣教師たち：左より リース、キニー、サンダース、ハミルトン、コールベック、クック、コーテス、レーマン

1937年 7月

日中戦争始まる

小野 直一第18代校長

1938年 1月

ハミルトン校長退任
小野 直一校長就任
（初の日本人校長）

1938年2月18日
ミス・ハミルトン賜暇休暇による帰国のお別れ会

2月

軍部の指令により傷痍軍人のための白衣製作

5年生による傷病兵の白衣製作

白衣発送

7月

野尻湖畔にキャンプサイト完成
小学科夏期学校実施

1939年 2月

御真影奉戴式

1935年に文部省より御真影（天皇皇后両陛下の写真）を奉安していないことの注意を受け、4年後に下賜された。幼稚園から師範科まで全員が沿道に整列

御真影奉戴式

7月

学校農場開始

小学科：花岡学院 "林間学校用地" 借用の郊外農園

高等女学科：小平市花小金井の学校農場
真夏の除草では、讃美歌の「ひたいを落つる玉のあせ　化して垂穂の実となりぬ」を実感

1939年 9月

第二次世界大戦勃発

1940年 6月

礼拝前の宮城（皇居）遥拝始まる

宮城遥拝

12月

宣教師の帰国始まる

ミス・ケギーお別れ

ミス・レーマン送別会

1941年 3月

**校名を東洋永和女学校と改称**

小学科を附属初等学校と改称

校名に敵性国イギリスを表す「英」の文字が入っていたことから、1941年3月15日東洋永和女学校と改称

宮城外苑勤労奉仕ー草取り

6月

宮城外苑勤労奉仕、学校農場作業、明治神宮参拝、五大節、勅語奉読式が学校行事となる

7月

東京府の通達により、野尻他におけるキャンプ中止

1941年 12月

太平洋戦争勃発

**● カナダ帰国後の宣教師の先生方**

1942年6月に交換船でカナダに帰国を余儀なくされた元校長のミス・ハミルトン他、何人もの宣教師たちは、帰国後に日系人収容所に抑留された青少年のための教育に力を尽くされました。宣教師の先生方は、帰国後も日本人を敵と思わず、日本人や日本とカナダの親善のために、努力されたのです。

## 1942年 2月
東洋永和特設防護団結成
防火訓練始まる

## 4月
高等女学科1年生
から国民服を着用

1942年入学高等女学科1年2組：
国民服（冬服制服）

1942年入学高等女学科1年2組：
国民服（夏服制服）

## 6月
ミス・ハミルトン
交換船にて帰国

## 10月
高等女学科4年生、
小林商店（ライオン歯磨
工場）にて勤労奉仕

## 11月
運動場落成感謝式・
運動会

運動場落成感謝式
式辞：清水由松校主

運動会にて高等女学科2年
女子青年体操

## 1943年 5月
全生徒、防空服装
（もんぺ着用、防空
頭巾持参）義務化

## 9月
ミス・コーテス交換船での
帰国をもって全てのカナダ
人宣教師が帰国

## 12月
校内の金属回収

鉄柵と門燈は献納し、
防火用水設置

## 1944年 3月
校名を東洋永和高等
女学校と改称

## 7月
高等女学科3・4・5年生と師範
科生、学徒勤労動員に出勤開
始（3・5年生―沖電気芝浦工
場東洋永和作業所、4年生―
安藤電気蒲田工場、師範科―
群馬県嬬恋農園）

高等女学科：沖電気
株式會社東洋永和作
業所での勤労動員

学徒勤労挺身隊の腕章

## 8月
東京都庁の指令により
幼稚園休園
幼稚園師範科を東洋
永和保姆養成所と改称

師範科：群馬県嬬恋村農家での勤労動員

初等学校3年生以上、集団疎開（栃木県出流山）

栃木県下都賀郡寺尾村出流山満願寺
山門の表札「東洋永和女学校初等学校分教場」

初等学校4・5・6年生

## 11月
幼稚園、東洋永和保
姆養成所附属戦時保
育所と改称し、開設

## 12月
高等女学科2年生も勤労
動員に加わり、学校工場
に出勤。3年生は沖電気
芝浦製造所または中央
光学精機へ異動

## 1945年 3月
**東京大空襲**
初等学校1・2年生も
集団疎開に合流

1945年3月 戦時保育所 早目の修了式
（1944年11月開所、近所の疎開できな
かった幼児）

## 5月
**東京山の手
大空襲**

## 8月
**終戦**

## 10月
集団疎開学童帰校

1946年3月高等女学科を4年で
卒業

## 1946年 6月
幼稚園再開

## 11月
東洋英和女学院に
改称

### ●永和を守った教職員

空襲により1945年4月には鳥居坂一帯が焼失、5月には鳥居坂教会も灰燼に帰しましたが、永和の校舎だけは健在でした。その背景には、日夜命懸けで学校を守り抜いた長野彌校長率いる教職員の働きがありました。1ページ上の写真は、終戦直前の7月に校長以下17名の教職員が永和を死所と定め記念に撮影したものです。

一九四五年三月まで、戦時中の五年間を永和の高等女学科で過ごされた下山田典子さんの手記の一部により、戦時下の永和生の様子をお伝えします。手記のほぼ全文は、「史料室だより」No.七五（二〇一〇・十一）とNo.七六（二〇一一・四）の【特集：勤労動員】に掲載されています。「史料室だより」のバックナンバーは学院ホームページに掲載していますので、是非お読みください。下山田さんは、二〇一五年四月に天に召されました。

# 戦時下の女学校生活

下山田（しもやまだ） 典子（ふみこ）
（一九四五年高等女学科卒、旧姓 有島）

## 学校工場での勤労動員、授業

五年生になり沖電気株式会社の学校工場で働くことになり、無線受信・送信機の組み立て、コイル巻き、マイカ切りなどの作業にあたった。作業服はカーキ色のスフ（ステープル ファイバー）、瀬戸物のボタン、履物は鯨や鮫の皮の靴なども形にさえなっていればそれでよしとしなければならなかった。そのほか、何でも不足しがちで不自由だったが、日本中皆同じと思うから余り苦にはならなかった。それどころか、そんな中から何かを生み出し、たのしむ心を持っていた。

学校工場の昼休みは体育館でバスケット、庭でバレーボールやソフトボール、散歩、中庭で静かに語り合ったり、讃美歌や外国民謡を歌うグループなどさまざまだったが、学校で作業をしていたお陰でその時間をたのしく過ごす事が出来て幸せだったと思う。

学校工場の時期でも勉強が遅れないようにと授業時間をとって下さる先生に「私達が今しなければならない事は、国が戦争に勝つためのこの作業です」などとなまいきな口をきいていた。「語学を修める事は敵を知ることだ」と、特別に昼休みに英語のクラスを開いて下さった光明先生がモーパッサンの「くびかざり」などを講義して下さった事をなつかしく思い出す。

## 空襲警報 ― 待機

空襲のサイレンが鳴ると、生徒達は直ちに避難、待機することになっていた。緊迫した空気に先生も生徒もひとかたまりになって飛行機の爆音に耳をすまし、その重苦しい音がどの方向からどの位の速さで近づいてくるのかを、息をこらし神経を一点に集中して頭上を通り過ぎるのをじっと待つのだった。

麻布十番が空襲を受けた日も「死なばもろ共ね」「東洋英和の為ならば」など軽口をたたきながらも、次々に知らされる情報に不安が増してきて「今日こそここにも…」と胸の痛くなる気持ちに襲われるのだった。

昼間の長時間の空襲の帰途、朝は在った家並がすでに消失しているなどという事もあった。市電はすぐ故障して役に立たず、渋谷・目黒・五反田などからさえ歩いて来る者もあり、バスを押して来たなどという話も聞いた。時間通りに通学することもままならないのに、皆、愛国心、愛校心旺盛で、罹災や疎開で転居した遠いところからセッセと学校工場まで通っていたものだ。

1945年3月11日撮影（後列左端が下山田さん）

## 昭和二〇年三月　卒業式

卒業式は、私達五年生と、戦時特別措置として四年生も同時に卒業となったが来賓は浜崎（次郎）牧師だけ。父母の列席もなく、花さえない有様だった。先生方は、ズボンにゲートル、モンペの上・下、生徒もセーラーの制服やへちま衿の学生服ありでスカートは着用出来なくてちぐはぐな服装が多かった。しかし揃わないのは着る物だけではなかった。大切な友人達が一〇日余り前の大空襲で亡くなり、焼け跡を尋ね歩いてもついにみつからなかった事は皆の心を痛くした。

式なかばに警戒警報のサイレンが鳴り、又待避かと皆、顔を見合わせたが、空襲にはならないで無事に式は進行した。

神はわが飼主なれ
我、常に乏しからじ
緑の野にいこいの汀に
神は我をともない給う
御名のゆえに生かし
我を直き道に導き給う
たとえ死の谷をゆくも
恐れあらじ　汝とゆけば……

詩編のコーラスの歌声を合わせながら、自分に納得させているような気持ちだった。今日別れて、又何時逢えるだろうか！　日本はどうなって行くのだろう。恐らく皆の心の中も同じだったろうと思う。

## 五月　帝都大空襲

五月二三日、二四日、二五日と連続して空襲があり二四日は五〇〇機以上の敵機が東京上空に来襲し、いわゆる絨毯爆撃をした。二五日も大空襲があり鳥居坂の坂上にある叔母の家に仮住まいしていた私達一家も連日の空襲に寝不足だったにもかかわらず何かありそうな異常な気配を感じて飛び起きた。暗い空に次々と飛来するB29。そのうちガソリンのにおいがしてきて様子がおかしいといい合っていたら爆撃が始まった。庭を昼間のように照らしだしたエレクトロン焼夷弾をやっと消し止めると、じきに油脂焼夷弾がザザーッとすごい音を立てて落ちて来た。大きな家がバリバリ燃える。本当にこの世の終りかと思う光景を目のあたりにしながら学校は焼けてしまったのだろうか？　どうぞ焼けませんようにと祈る気持ちでいたが、百米も離れていない学校までも行く事が出来なかった。明け方になって兄が見に行って学校から青楓寮まで残ったと聞いた時のうれしさは口には云い表わせない。本当に奇蹟でも起きたのではないかと思った。

# 追悼　水澤　郁夫　理事長

二〇一五年十二月三日に、水澤郁夫理事長がご病気のため逝去されました。これまでの英和でのお働きに深く感謝し、謹んで哀悼の意を表すとともに、ご遺族に主のお慰めと励ましが限りなくありますよう、お祈りいたします。

**水澤　郁夫　理事長**

一九三一年六月二〇日生まれ。
一九四七年十二月二五日受洗。
一九五五年青山学院大学経済学部商学科卒業後、日本銀行入行。一九七六年オリエントリース株式会社（現オリックス株式会社）に入社、同社常務取締役を経てオリックス生命保険株式会社取締役副社長を務める。
東洋英和女学院では、一九九七年五月に評議員、二〇〇七年四月に常務理事に就任。この間、二〇〇一年より十二年間評議員会議長を務める。二〇一三年五月に池田守男理事長・院長の逝去の後、理事長代行となり、同年七月に理事長に就任。青山学院評議員、北関東学園理事、聖公会神学院理事も歴任。
日本聖公会 大宮聖愛教会会員。
二〇一五年十二月三日召天。

## 水澤郁夫理事長のご召天にあたり

**院長　深町　正信**

去る二〇一五年十二月三日、水澤郁夫理事長が突然、入院先の聖路加国際病院で脳梗塞の病のため八四歳で召天されました。その数日前、十一月二七日（金）に開催された評議員会、理事会には大変お元気な姿でご出席になり、理事長は普段にもまして手際良く、議長として理事会の議事を進行され、そして、いつものように笑顔で、親しく挨拶を交わしてご帰宅になりました。私たちはまさかそれが水澤理事長との最後の別れになろうとは夢にも思いませんでした。
しかし翌日、ご家族から理事長が夕食前、容体が急に悪くなり、病院に緊急入院されたとのお知らせを受けて、ただ一日も早く健康を回復されることを祈るのみでありました。しかし、残念ながら、十二月三日早朝にご召天になられたとのお知らせを受けて、学院関係者一同呆然とし、涙するばかりでした。
ご遺族の満里子夫人、ご長男の郁文氏、ご長女の真澄さんに、主の豊かな、天来からの慰めと平安とを心から祈るものであります。
私が水澤理事長と初めてお目にかかったのは、青山学院の評議員会の席でありました。同氏は青山学院大学の卒業生であり、一九九六年から学校法人青山学院の評議員としてお務めくださいました。毎年全学院クリスマス礼拝と祝会が開催されるおり、夫人方は会議の最中にキャンパスツアーをしていただき、礼拝と祝会に合流していただくことになっていました。そこで毎年、水澤理事長ご夫妻にお会いし、ご挨拶させていただいてきました。
更に、当時、世田谷の巡沢には青山学院大学理工学部キャンパスがあり、大学クリスマス礼拝と祝会には普段お世話になっている近隣の方々を自由にお招きするのが恒例となっていました。毎年、水澤理事長はご夫妻で必ずご出席くださいました。ご夫人が青山学院大学の卒業生であることを毎年、私に言われたことが懐かしく思い出されます。
水澤理事長は数々の要職を歴任され、社会的に言えば、実力と経験の持ち主でありました。しかし大変にフランクな方で、優しい心遣いの持ち主で、誰に対しても、細やかな心遣いをされ、議論するときは堂々と論陣をはって、鋭い論争をされる方でありました。
水澤理事長の信仰歴を少したどると、『楓園』七二号に、「私と東洋英和女学院との出会い」という理事長就任の挨拶を載せておられます。それによれば、幼いとき影響を受けたのは大好きなエリザベス・アプタン先生で、一六歳のとき、埼玉県にある大宮愛仕幼稚園の園長アプタン先生が一時、米国に帰国されていましたが、再び日本へ帰国されたとき、その歓迎会がありました。その後、そこで出会った聖公会大宮聖愛教会牧師と東洋英和女学校幼稚園師範科の卒業生である牧師夫人といろいろとお話をしたことを機に、教会に通い始めました。そして、一九四七年十二月二五日、桜井健司祭により洗礼を受け、翌一九四八年六月二〇日、一七歳のとき、大久保直彦主教により堅信を受けて、キリスト者としての信仰の生涯を送られました。洗礼名はパウロであります。
水澤理事長のご葬儀は、聖路加国際病院、聖ルカ礼拝堂で、日本聖公会北関東教区の広田勝一主教と司祭様五人が執り行なってくださり、厳かな中に、ご遺族の上に天来からの慰めを祈る告別の式でありました。各界から数多くの方々が弔問に来られ、告別式に参列し、そして、先生のご遺体と最後のお別れをされました。
地上の愛する人を一人減じましたが、天に一人を増したことを信じ、長年にわたる、水澤理事長とのしばしの別れをなし、また、ご遺族の上に、主の豊かな慰めと平安とを心からお祈り申し上げるものであります。
結びに、聖書の言葉に聞きつつ、私たちは先生の魂を主にお委ねしたいと思います。
「イエスは言われた。『わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。』」（ヨハネによる福音書十一章二五・二六節）

## 学院 NEWS ①

# 第二回教育シンポジウム

## 「東洋英和に学ぶ私たち：過去・現在・未来」二〇一五年十一月六日

副院長　吾妻　國年

今回のシンポジウムは、児童生徒学生並びに卒業生からの声に耳を傾けようとの深町院長のご示唆を受けて企画されました。その模様をご紹介します。

最初に水澤理事長が若き日の教育学との出会いを熱く語られ、続いて深町院長が、「R・ニーバーの祈り」をもって教職員を激励された。

第一部・発題では、小学部六年生の今泉理子さんと髙橋光彩さんが、学校生活での心の拠り所や海外ボランティア・国際交流への将来的な希望を生き生きと表明した。中学部3年生の中井桜子さんは、クラブや友情の大切さと共に礼拝・聖書から学ぶことの重要性を語り、高等部二年生の清水希来さんは自らの進路が定まる道程とグローバル化の考察、同じく武田祐里さんは学内外での交流と経験に基づき、将来への進路への志を抱負として述べた。カトリック系高校から入学した大学一年生の山里佳子さんは、英和の歴史と伝統の深さへの共感を語り、同四年生の三木奏さんは二度の留学体験の意義と英和における神の愛と「敬神奉仕」の精神が各英和生の長い人生に深い影響を及ぼすであろうとの予見を述べた。

第二部・高校生と大学生のトークでは、二人の司会者（石澤中学部長・大倉愛海さん）の絶妙かつ雰囲気ある問いかけの中、発題者たちから普段は聞けない本音の発言を聞くことができた。

第三部では卒業生社会人からコメントが寄せられ、金安真生依さんから、同窓会桜プロジェクトの「英和の源流を訪ねるカナダへの旅」参加で受けた深い印象、および在学生たちの発題に共通する「みんな家族です」の思いを強く感得したことが述べられた。そして大先輩である押山啓子さんからは、若き日に受けた英和教育が深く自身の中に刻印され、教育者となった自分をいかに強く支え実践へと向かわせて来たかが印象深く語られた。以上を踏まえ、池田大学学長が閉会の辞で、「今回のシンポジウムは実に刺激的で面白かった」との感想と共に、激しく変容変化する時代の中での「学び続ける意志」の重要性が語られるとともに、各発題に通底する「建学の精神」への深い共感が表明された。

第１部発題（高等部２年生）

司会の石澤友康中学部長と大倉愛海さん（大学４年）

第３部卒業生社会人からのコメント
上：金安真生依さん
（2011 年大学卒）
下：押山啓子さん
（1968 年高等部卒）

## 学院 NEWS ②

# お年寄りを助けた勇気ある英和生

英和生の勇気ある行動に感動された方から、中高部に匿名のお電話をいただきましたのでご紹介します。

「十一月一〇日の夕方、自由が丘駅の踏切で、おじいさんの押していたカートのタイヤが線路に挟まれて荷物が散乱してしまいました。まもなく遮断機が閉まっても、おじいさんは一向に逃げようとせず荷物を拾い続けていました。制服の生徒たちが大きな声で退避を呼びかけてもずっと荷物を拾っていたので、生徒たちは機転を利かせて列車停止ボタンを押して電車を停め、おじいさんは無事に線路内から出られました。周りには大人が何人もいたのに、行動を起こしたのは生徒だけでした。制服ですぐに東洋英和の生徒だと分かりました。日頃の教育の成果でこのようになさったのだと思い、差し出がましいようですがお電話いたしました。」

後日、この生徒二人は高等部の二年生ということが分かりました。

# キャンパスを越えて学ぼう

## ～ゼミや授業で取り組む学外での学習や活動～

大学では特にここ近年、教員の一方的な講義形式による授業ではない、アクティブ・ラーニングに総称される「学生による能動的な学修」を推奨しています。例えば、授業にグループ・ディスカッションやディベート、ワークショップやプレゼンテーションなどの手法を有用したり、国内外でのフィールドワーク、サービスラーニングやボランティアなど体験型科目を開講しています。また、企業や外部団体の主催するプログラムや、学生に就業体験の機会を提供する制度（インターンシップ）への参加を通じて、学生自らが調査し、課題を発見し、問題解決の提案をするなど、自発的な体験を通じて学修する機会が増えています。

さらに今年度より、「※PBL型教育支援授業・プログラム」として、学生の主体的学習を促し、よりよく問題を解決する方法を体験によって修得することを目的とした授業科目やプロジェクトに対して、必要な財政的支援を行う取組みも開始されました。

今回はゼミやプロジェクトの取り組みを三つご紹介します。

※ PBL（Project-Based Learning）

### 小寺ゼミ　～磨け、創造力！

国際社会学部　小寺　敦之

多くの学生にとって「メディア」は、見たり、聞いたり、使ったりする対象でしかありません。しかし、大学でメディアを学ぶのであれば、自分が作り手になる経験もしてほしい――。その想いから、私のゼミでは数年前からクリエイティブ活動を取り組みの軸に据えています。

ゼミ生は春にいくつかのチームに分かれ、それぞれプロジェクトを立ち上げます。一昨年度は広報に関心のある学生が「英和生紹介ムービー」の制作を行いました（大学ウェブサイトに掲載中）。学外の広告コンクールや映像コンテストへの出品を目指すプロジェクトも毎年展開しています。コピーやデザイン、映像の制作が初めてという学生も少なくありませんが、スキルの修得も含めて自分たちの力で作り上げてもらう方針を採っています。

ゼミ生のレベルも毎年少しずつ上昇しており、成果が目に見えるようにもなってきました。二〇一五年度は、新しいまちづくりのアイディアを提案する「大学生まちづくりコンテスト」に初参加しましたが、チームを組んだ五名は、現地でのフィールドワークを重ね、夏休みも自主的に集まりながらプランを考え、出場三一大学六九チームの中から一〇チームのみが出場できる本選の切符を手にしました。九月十二日（土）に行われた東日本ブロックの本戦（於：山梨県笛吹市）では、惜しくも最優秀賞は逃しましたが「壮大なスケールのアイディア」と評され、見事「クリエイティブ賞」を獲得しました。

チームリーダーの原真奈美（国際社会学科三年）は「ゼミ以外ではなかなか会えない五人でチームを組みましたが、同じ目標のもとで活動してきたので強い団結力が生まれたように思います。深夜もオンラインで議論したり、何度も現場に足を運んだりという夏休みでしたが、自分たちは何でもできるんだという自信がつきました」と総括してくれました。「受賞で取り組みが認められたのは嬉しいけれど、やっぱり最優秀賞を逃したのは悔しい」と、次年度の再挑戦も視野に入れているようです。

クリエイティブは、単なるひらめきではありません。文献を読み、資料を集め、調査を行って問題点を浮き彫りにするという地道な努力、新しいアイディアを出しては批評して破棄するという気の遠くなる作業があります。その中から、新しい発想が生まれ、人の心に響く作品ができあがっていきます。ゼミ生には、粘り強く、協力し合いながら困難を克服し、レベルの高い企画力・創造力を養ってほしいと期待しています。それは、以降の人生において間違いなく活かされる能力になるでしょうから。

「広告プロジェクト」アイディア検討会にて

「まちづくりコンテスト」表彰式にてクリエイティブ賞を受賞

「映像プロジェクト」の編集風景

## EIWAプロジェクト

### ～二〇一五年度PBL学内公募採択プログラム

総合実習センター講師　町田　小織

本プロジェクトは、今年度学内公募で採択されたPBLのひとつです。EIWAの頭文字にはそれぞれ意味があり、EはEnlightening、IはInteractive、WはWonderful、そしてAはActiveです。新規プロジェクトにもかかわらず、無謀にも三大学合同オープンPBLに挑戦。実践女子大学、福岡女学院大学とともに、クライアントであるリコージャパン株式会社からのテーマに取り組みました。チーム対抗で課題の仮説検証、解決策の提案についてスライドを使って説明し、そして成果物であるクリアファイルのデザインを発表します。スケジュールは六月一三日に実践女子大学で中間発表、七月二三日に本学での学内予選を経て、各校上位二チームが八月五日の福岡女学院大学における決勝に進出！というコンペ形式のプログラムです。本学からはチーム「初志貫徹」と「おRICOH部」が福岡行きの切符を手にしました。残念ながら決勝での入賞はかないませんでしたが、PBLを通してリコージャパン本社を訪問したり、同社社員の方へインタビューしたり、評価軸に則ってスライドやクリアファイルのデザインを考えたりすることで、「働く」ことへのイメージがポジティブに変わったようです。また他大学の学生がプレゼンテーションする内容やスキルに刺激を受け、さらに社会に出て行くには、どんな力が自分には足りないのかに気づき、新たな課題を意識する機会となりました。英和生の伸びしろに驚かされ、無限の可能性を感じた数ヶ月でした。

学内選考での EIWA プロジェクト参加者集合写真

学内プレゼンで優勝した「初志貫徹」チーム

福岡女学院大学での「お RICOH 部」のプレゼン

## 西ゼミ

### 被災地での身体表現ワークショップ

### ～何もできない自分を知る

人間科学部保育子ども学科　西　洋子

石巻市・東松島市での月一回の「てあわせ」表現ワークショップには、自閉症等の発達障がいの子どもたちや家族、現地の教育、福祉関係者が集まる。活動はいたってシンプルで、手と手をあわせて一緒に動くだけである。年齢や性別、障がいの有無にかかわらず誰もが簡単に行える表現だが、自由で即興的である分、奥が深い。当初学生たちは、自分が支援者として被災地に出かけることを疑わない。ところが、現場で出会うのは、あまりに多様な人々が、身体での表現を自由に創り合う「分けない世界」である。どうしてよいかわからず、身体が固まって動けなくなるという。英和生同士で集まっていると「何しにきたの？」と私から声がかかる。そんな時、自閉症の子どもが目をあわせずに近寄ってきてくれる。現地の母親たちから「来てくださってありがとう」と、ただ在ることへの感謝が告げられる。緊張は緩み、差し出された手に手を重ね、おずおずと表現し、やがて笑顔になっていく。「何もできない自分を知る」、その身体感覚は大学内では決して学べない。将来、子どもと共に生きたいと願う学生たちである。人と人との存在の対等感を自らの身体で感じ、関係性から創出する表現の豊かさを実感した学生たちは、「また行きたい！」と申し出る。ワークショップの立ち上げから三年、年間を通じて参加するゼミ生や、継続して参加する卒業生は少なくはない。何もできない自分に素直に向き合い、他者と共に生きる意味とそのための学びへの意欲を築く…彼女たちの現場での成長は、眩しいばかりである。

（活動HP　http://teawasekaken.jp/）

石巻・東松島のみなさんとの公開ワークショップ
（せんだいメディアテーク：2015 年 8 月）

# 初めてのミャンマースタディツアーを終えて

高等部教頭　北崎　勝彦

昨年度より始まりましたグローバル教育プログラム「Toyo Eiwa Activities for Myanmar（TEAM）」は、内容をよりアクティビティなものとするため、現地ミャンマーでの研修の実現が計画されていました。従来、新たな研修旅行の実施には相当の準備期間が必要ですが、今回、東洋英和女学院大学教授　滝澤三郎先生が大学生を対象に実施されておられる研修旅行に加えていただくことで、早期に実現できました。

今回参加した六名の高等部生は、何を自分で学び、確かめてくるか、それぞれ目的をもってこの研修に臨みました。旅程が進むに従い、参加者の見方が大きく変化していくのが感じられ、教材や資料では得られない、五感を使って現地で学ぶことの意味の大きさを改めて実感させられました。目前の情報の殆どが、自分自身が生活する世界とは大きく異なり、強烈な印象となって刻印されます。多民族のミャンマーでは文化や宗教、政情、経済状況などの情報は、日を重ね、移動していくうちに次々に新たなものがインプットされるため、膨大な量となります。生徒や学生たちはそのあまりに強烈で大量の情報を整理しきれずにいるようでした。情報整理のために一日の終わりにその日の研修を振り返り、各自、発見や考察をコメントペーパーに記し、一人一分程のスピーチを行いました。多様な視点や思考を共有しながらも、情報を少しずつ整理することができたと思います。高校生と大学生が合同で研修旅行に参加することは初めての試みでしたが、互いによい刺激を与え合い、高大連携の可能性が感じられるものとなりました。大学生は、新鮮で自由な思考をする高校生に新たな切り口でものを見る機会を与えられ、高校生は大学生の研究姿勢や考察法、分析法を学んだことと思います。一日のまとめのミーティングの後に自主的に勉強会を開くことがあったようで、〝自ら学ぶ〟を実践できたことは何よりの収穫でした。

中高部

## ミャンマースタディツアー報告

高等部一年　本田　陽萌

私たち高等部生六名は、先生方三名、大学生一六名と共に計二五名で、八月九日から八月一七日までミャンマースタディツアーに行きました。ミャンマーでは、ヤンゴン、ネピドー、サガイン、マンダレー、インレー湖などさまざまな場所を訪れました。急激な発展を遂げるミャンマーに行き、実際に目にしたことや、学んだことを報告したいと思います。

### ヤンゴン

シュエダゴンパゴダ

九日、一〇日はヤンゴンに滞在しました。九日の夕食で毎日新聞ヤンゴン支局長の春日さんのお話を聞きました。ミャンマーの人々の貧富の差や、実際にミャンマーで暮らす日本人として不便に思うこと、これから滞在する私たちが気をつけるべきことを聞くことができました。春日さんのお話で、ミャンマーの病院で誤診を受けたことを聞き、まだまだ発展していないところもあるのだと思いました。

一〇日は、ヤンゴン市内を観光しました。ミャンマーが世界に誇る「シュエダゴンパゴダ」という黄金のパゴダを訪れました。パゴダとは、ミャンマー様式の仏塔のことで、靴を履かずに裸足でお参りをしました。ミャンマーでは自分の生まれた曜日が重視されます。パゴダのまわりには曜日ごとに、お参りする場所があり、私は水曜日の所にお花をお供えしました。その後、ヤンゴン大学とUNHCR（国連難民高等弁務官事務所）を訪れました。ヤンゴン大学で、現地の大学生と英語で話すことができました。大学生の方が日本について熱心に話を聞いてくれたため、有意義な時間を過ごすことができました。自分と歳が近いのに、自分よりもはるかに世界に目を向けていて圧倒されました。UNHCRでは職員の方に、難民についてのお話を聞きました。ただ漠然と「難民」というひとまとまりにしか考えていなかったので、職員の方のお話はとても心に残りました。

最終日の一六日もヤンゴンを訪れ、カレーワ女子孤児院とスタウンピェ孤児院を視察しました。孤児院では、子どもたちとキャッチボールをして遊びました。また、お互いに歌やダンスを披露し、ミャンマーの伝統的な踊りを子どもたちに教えてもらいながら踊りました。孤児とは思えないほど明るく気さくな子どもたちと遊び、自分は恵まれた環境で過ごしているけれど、その環境を活用できないことに対し未熟さを感じました。

スタウンピェ孤児院

## ネピドー

十一日は、ネピドーの国家計画・経済開発省を訪れました。政府の方が、グラフなどのデータと共に政府の活動について説明をしてくださいました。政府は、長期・短期・毎年と三つの期間に分けて政策を行っていることを知りました。説明を受けて、国全体の利益しか見ていないように感じられました。そのため国民に民主化政策の利益がまわることはないのではないかと思いました。

## サガイン

トラックバス

十二日は、サガインの元日本兵墓地へお参りしました。墓地へ行くまでに乗ったトラックバスがとても印象的でした。そのバスは、トラックの荷台に座席が付いているだけでドアはなく、坂道では落ちてしまうのではないかというくらいスリルがありました。日本では考えられないような乗り物に乗り楽しむことができました。午後は日本のNGO病院（ジャパン・ハート）を訪れ、歌を歌いました。病院で、床に置かれたガーゼや落ちているゴミを見て、病院であるにも関わらず衛生面で不安になるところがありました。また、設置されているベッドが硬く、床ずれしてしまうと知り、物資だけでなく知識の支援も必要だとわかりました。

ジャパン・ハート

## マンダレー

食事に向かう僧侶たち

一三日にマンダレーの一〇〇〇人以上の僧侶が修行中のマハガンダヨン僧院を訪れました。僧侶たちの食事を見ました。食事に行くために、何十人もの僧侶たちが並ぶ様子を目にしました。年齢の低い僧侶も何も話さずに礼儀正しく並んでいて見習うべきだと身にしみて強く感じました。午後は、小学校を訪問しました。小学校には自分よりも年上の方が「民主化のおかげで学べるようになったから」と、生徒として熱心に学んでいました。また歌のプレゼントをもらい、心が温まりました。

## インレー湖

インレー湖

一四日、一五日はインレー湖を訪れました。一四日は、ヘーホーの市場を訪れた後に、インレー湖をボートに乗り移動し、水上菜園や貼りすぎた金箔で丸くなってしまった仏像があるファウンドゥーパゴダを見ました。また、絹織物工房ではミャンマーの伝統的な織り方を目にして、機械によって作られたものにはない温かみや伝統を感じることができました。そして、水上ホテルに初めて宿泊し、民主化につれて外国人向けに土地も変わってきているのではないかと思いました。

織物工房

一五日は、ニャウンヨー村を訪問し、村の人々の生活を見ました。村では、家の壁の独特な作り方やお葬式など、村ならではの知恵や文化を知り、ミャンマーの文化や伝統が、民主化で海外の影響を受けて途切れることがないと良いと思いました。

市場

## ～ミャンマースタディツアーで学んだこと・感想～

私が今回のミャンマースタディツアーに参加して学んだことは、自分の基準で物事を考えないことです。ヘーホー市場を訪れた際に、売り物である食品にたくさんのハエが群がっていることや、生の肉を目の前でさばいて売っていることなど、日本であれば不衛生であると、問題になってしまうような光景を目にしました。しかし、ミャンマーの方はそれらを問題視せずに、あたりまえのように市場の物を食べて暮らしています。私たちが不衛生であると思うことは、日本を基準に考えているからです。日本と比べることでミャンマーの文化を知ることは大切なことだと思うけれど、必ずしも日本が基準となるのではないと気がつきました。そして、小さな子どもや片足のない方が物乞いをしているのを目にして悲しくなり、援助をできない自分の無力さを痛感しました。貧しい人々に対して直接働きかけることはできないけれど、募金などの自分にもできる小さなことで、少しでも役に立つことができたら良いと思います。ミャンマーに行くという貴重な経験をただの「思い出」とするのではなく、実際に見たことや学んだことを自分の糧として活かしていきたいです。

インレー湖畔にて

# 二〇一五年度心と体の勉強会
# 「いのち」を伝える

小学部養護教諭　吉越　聖子

二〇一五年六月二五日、上野動物園の飼育員である橋川真弓先生を講師にお招きし、心と体の勉強会が行われました。心と体の勉強会は、年に一度、子どもたちの健やかな成長のために今必要なことを、さまざまな専門分野の方から学ぶ会です。今年度は、「『いのち』を伝える」、というテーマでお話を用意してくださいました。

動物園は、家族、幼稚園や保育園で一度は訪れたことがある、身近な場所です。昨年の春の遠足では、低学年が上野動物園を訪ねました。上野動物園というと、やはり人気はゾウ、パンダですが、隠れた人気エリアが「子ども動物園」です。今回、お話くださった橋川真弓先生は、子ども動物園の飼育員さんです。子ども動物園にはウサギやモルモットなどの小動物だけでなく、ヤギ、アルパカ、ロバ、ラマ、ミニブタ、そして野間馬、木曽馬、トカラ馬、見島馬、口之島馬という、日本に昔からいる馬種、在来馬が飼育されています。

お話は、子どもたちの発達段階に合わせて、一～三年生は「木曽馬幸泉（さちいずみ）の出産と子馬の成長」、四～六年生は「ミゼットホースのしのぶが教えてくれたこと」という内容で用意してくださいました。飼育員が使っている道具や、仕事が終わった後はお風呂に入ってから園を出る話など、初めて知る動物園の裏の様子には驚きの声が上がり、子馬が生まれる瞬間の映像には子どもたちも息をのんで見守っていました。しのぶとの出会い、体重が増加してしまったしのぶのために行った減量大作戦、そして年をとり少しずつ弱っていく姿や亡くなるまでのエピソードに、たくさんの感想の手紙が届きました。

お話の後は、必ず各クラスで振り返りの時間を持ちます。先生への手紙や感想を書くこともあります。子どもたちから預かった手紙は、全て先生へお届けしました。夏休み中、上野動物園より大きな筒が届きました。中には模造紙が三枚。橋川先生のいらっしゃる子ども動物園の動物たちやスタッフの紹介、子どもたちへのお返事が模造紙いっぱいに書かれていました。夏休み明け、保健室前に貼られた橋川先生からのお返事を子どもたちが一生懸命読んでいる姿に、継続した関わりと学びをいただけたことへの感謝の気持ちで胸がいっぱいになりました。

毎年、教職員で、最近の子どもたちの様子、子どもたちをとりまく社会情勢や自然環境などに思いをめぐらせ、子どもたち一人ひとりの顔を思い浮かべながら、次の講演をお願いする方を検討します。「この子にはこんな話を聞いてほしい」、「あの子にはこんな話が心に響くかしら」、と相談をするとき、小学部全体が家族のようで、温かい気持ちに包まれます。保健室では、子どもたちが健康に支えられ、神さまからいただいた賜物を輝かせることができるような関わりを大切にしています。子どもたちに今必要なことを、この勉強会を通して届けることができるように、これからも守り受け継いでいきたいと思います。

**子どもたちの手紙より（五年生）**

私の家ではエビ、ウーパールーパー、イモリなど六種類の生きものを飼っています。どれもアルパカや馬のように大きくはないけれど、みんな生きているのだから、それを育てるのは責任の重い、一つの仕事なのだと思いました。今年亡くなったしのぶちゃんのように、最期まで一生懸命生きることの大切さを学びました。

橋川さんからの子どもたちへのお返事

橋川さんへの感謝のお手紙

児童が送ったお手紙の絵

心と体の勉強会は、健康診断で診てくださっていた小児科医内藤寿七郎先生（元愛育病院名誉院長）による「健康教育講演会」として一九九二年にスタートしました。教職員の中では保健勉強会という、子どもたちの成長を見守るために必要な知識を専門家から学ぶ会があり、その中で、子どもたちにも話を聞かせたいという教職員の思いが契機となりました。その後、「心と体の勉強会」と名前が変わりましたが、子どもたちを対象にした講演会として毎年開催しています。

# お父さまと一緒で嬉しいな

三歳、四歳の子どもたちとお父さま方との集い「父と遊ぶ日」。今年は運動会を計画しました。小学部体育館に総勢一六〇人程が、一人ひとり持つ力をいっぱい使って楽しいひと時を過ごしました。

ダンス、ラジオ体操に続いて最初の競技は四歳児の玉入れです。お父さまの声援の中、頭上のカゴ目がけて紅白の玉を投げる子どもたちの表情は真剣そのものでした。

次は、三歳父子の「出発進行」。父子で段ボールの電車に乗り込み、橋を渡り、踏切を通り過ぎ、くねくね道を走って終点まで進みます。ゆっくりと和やかな電車の旅でした。

父子でラジオ体操「1、2、3、4…」

次の競技は四歳お父さまによる「台風の目」。一メートル程のポールを三人横並びになって握ったまま走り、二本のコーンを周って帰ってくるリレーです。ポールがしなるほどの気迫で、応援する子どもたちも目を見張っていました。

続いてかけっこです。三歳児は向こう側で待つお父さままで全力で走り、お父さまにおんぶしてもらってゴールします。子どもたちはお父さまの背中の大きさを感じたことでしょう。四歳児はお父さまの所まで走ると、今度はお父さまと手を繋いで一緒に走ります。子どもが飛ぶようにしてゴールする父子もいてひやっとするほどでした。

最後の競技は大玉送りです。全員参加で大いに盛り上がりました。

こうして全て終え、幼稚園へ戻った父子は一緒におやつをいただき一休みです。帰りの集まりで、三歳児は「おとうさんだいすき」の歌をありがとうの気持ちを込めて歌い、四歳児は、この日を楽しみに待ちながら作った栞やコースターのプレゼントをお父さまに手渡しました。お忙しい中いらしてくださったお父さまに、そして一日守ってくださった神さまに心から感謝申し上げます。



# 遊びを介しての出会い ―砂場にて―

前日に五歳児の子どもたちがなかまと一緒に作った山が、そのまま砂場に残っていた朝のことです。「大きい山だね」と四歳児のAちゃんが保育者に話しかけます。「そうね。私も山を作ってみようかしら」と、保育者がシャベルを手に持ちました。「ぼくもやってみよう」と、Aちゃん。しばらくして近くで泥団子を作っていた四歳児のBちゃんが、「水をかけて、トントンって手で砂を叩いた方が、崩れないよ」と言います。それを聞いたAちゃんは、「ぼく、水をくんで来るね」と言ってバケツに水をくんで来ました。Aちゃんが山の上から勢いよく水をかけると、その水はBちゃんの足元の方へ流れて行きました。Bちゃんは笑いながら「ジョウロでちょっとずつかけたら?」と言います。二人の様子を見ていた保育者は『今だ』と思い、「Bちゃんも一緒にしましょうよ」と誘いました。Bちゃんは嬉しそうに「そうだね」と言い、泥団子をさっと草かげに隠してから、ジョウロで水をくんで来ました。Aちゃんは、トントンと手の平で叩いて砂をかためていきます。いつの間にか二人は交互に水をくみに行き、山に水をかけ、シャベルで砂を積むことを繰り返し、「ぼくの背の半分はあるかな」等と話しています。保育者はそっとその場を離れました。それから二人は「いちにの、さん」と一緒に山の上から水を流し、川を作り始めました。また山の端と端からトンネルも掘りました。この日、二人は初めて一緒に遊びました。翌朝、砂場で先に遊んでいたAちゃんの元へBちゃんが走って行く姿がありました。それからも二人は遊びを共有しています。

砂場は、一人で黙々と砂に向き合う場でもありますが、夢中になって心を開放していくうちに他の子どもとのふれ合いや出会いが生まれる場所です。園にはそのような場がそこここにあり、交わりの物語が生まれています。

砂場遊びをたのしむ子どもたち

卒業生たちの軌跡を追って

# この人に聞く 29

# 英和生時代の想い出

桐朋学園他で教鞭をとられ、現在も若い作曲家のための国際作曲賞である入野賞の運営をはじめ、世界の音楽交流に貢献されている入野さん。
8年間の英和生時代が、どのようにその後の入野さんに影響したのかを、想い出とともに教えてくださいました。


NPO法人JML音楽研究所理事長、入野賞基金代表

入野（いりの）　禮子（れいこ）（髙橋（たかはし）　冽子（れいこ））さん

1955年高等部卒

## 小学五年生で初めて出会ったキリスト教

小学三年生で終戦を迎えた私は区立の小学校に籍を置いていました。神が何かも知らない私が何故か「神様」と祈る様になりました。四年の終わりに東洋英和に編入することが決まり五年から英和生になりました。井の頭線で渋谷まで無事生きて着けるか恐怖の毎日でしたが、ある時神泉駅で急停車した時に鎖骨が折れてしまい駅長室へ運ばれました。当時は何人かの英和生が井の頭線で通学しており、ある上級生が、母親が来る迄お世話をして下さりどんなに嬉しかったか知れません。十二月でしたからイエスの生誕劇が決まっていて私はヨセフの役をやる筈でしたが勿論出来ません。今でも残念な想い出です。

クラスメート達は何も知らない新入生の私にとても親切で、ミッションスクールは素晴らしいと思ったものです。只一つ困った想い出はカフェテリアでの昼食です。六年生はホステスとして一年生のテーブルに座りますが私の大嫌いな脱脂ミルク、それが問題です。しかし班長として飲まなければなりません。昼食がどんなに辛かったか!!　しかし「日々の糧を、与えたもう…アーメン いただきまーす。」未だ食料事情が良くない時代でしたから貧しいお弁当にも心から感謝しました。

此の歌は後日、私がACL（アジア作曲家連盟）の会議と音楽祭に参加した時に韓国の作曲家と食事を共にした時のことです。私は「日々の糧を与えたもう」と歌った所、韓国でも歌っていたと共に自国語で歌い、お互いに手を取り合って喜びました。フィリピンの作曲家はカトリックなのでニコニコしながら我々を眺めていました。

## カフェテリアのテーブルと椅子

娘の智江も中学部から英和生になり、私が母親として英和を訪れた時に懐かしいカフェテリアを覗いてみましたが何とないのです。あのテーブルも椅子も！　一体どうしたことでしょう？　それらは軽井沢の追分寮にあることが分りました。軽井沢の我が家は英和の追分寮に近かったので、早速ある夏に確かめに行った所、ありましたーありました。古い友達に会ったような気持ちで嬉しかったです!!

2015年5月27日　ドイツ バート・ゼーゲベルクでの第25回日独青少年交流コンサート

## 毎朝眺めた「敬神・奉仕」

在学中はなにも考えずに眺めていた「敬神・奉仕」でしたが卒業後此の精神が教育者として生きる私にとって大切なことであることを気づかせて下さいました。たとえ厳しくとも愛情を持って指導すれば生徒や学生は大きく成長してくれるのです。

## 讃美歌

英和では毎朝礼拝があり、讃美歌を歌い聖書を読み先生方が交代でお話しをなさいます。此の讃美歌が私の音楽の勉強に役立つとは思ってもいませんでした。ヨーロッパでは西洋音楽の長い歴史があり、和声感は生まれながらにして持っていますが日本人はそれがないので西洋音楽の和声を勉強する時に戸惑う人が多いのではないでしょうか？　しかし私はその和声の機能が良く分かるのです。どうしてか気が付きませんでしたがそれは讃美歌のお陰だったのです。全く違和感もなく和声学を学ぶことが出来ました。

八年間の英和の教育が私の人間形成にどれだけ大きく役立ったか分りません。全ての人種を愛し、多くの方々に助けられて自信を持って様々な音楽活動―文化活動が出来ることを心から感謝しています。英和を愛しています。

2015年9月25日　入野家所蔵のカール・カーリーの絵画を入野義郎（夫）の生家のあるウラジオストク沿海州国立美術館に寄贈、贈呈式に参列する。副館長と筆者（右）

■いりの　れいこ（戸籍名）、たかはし　れいこ（音楽教育の職名）／桐朋学園音楽科第1期生。作曲科卒。桐朋学園音楽部門、青山学院大学、高崎芸術短期大学（教授）、東京音楽大学付属音楽教室に勤務。現在NPO法人JML音楽研究所理事長、入野賞国際作曲賞代表。国際音楽交流を続ける（日独、露日、インド等々）。ACL（アジア作曲家連盟）名誉会員、全ドイツ青少年コンクール審査員。著書ソルフェージュテキスト（全8巻）、各所属協会の会報に執筆。

# 聖書の言葉

「あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。
しかし、必要なことはただ一つだけである。」

ルカによる福音書一〇章四一・四二節

有名なマルタとマリアのお話である。マルタはイエスさまの接待で忙しく、心を乱してしまっていた。しかし、マリアはイエスさまの言葉に耳を傾けて一心に聞き入っていた。

ここでのキーワードは「必要な一事」であろう。この一事はただの一事ではなく、すべてに通じる一事である。この一事がすべてを決定するのであろう。

私は、この聖句を東洋英和の建学の精神である「唯一」の主であるから、心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして主を愛しなさい、という聖句と共に思い起こす。「敬神」というこの一事に人間の精神を集中させることによって、人間の精神は統合され、余分な思い煩いは自然と消えていくのであろう。心を乱さない秘訣がここにあると考えたい。

大学宗教主任
吉岡　良昌

ヨハネス・フェルメール
「マルタとマリアの家のキリスト」

## 訃報

―心より哀悼の意を表します―

橋　久代氏　元中高部一般職員　二〇一五年七月二〇日
目黒士門氏　元大学教授等　二〇一五年十一月一日
ミセス・ヘレン・マージョリー・パセンコ（イェードン）
短期派遣宣教師（中高部英語担当）　二〇一五年十一月二三日
水澤郁夫氏　理事長　二〇一五年十二月三日

## おたよりコーナー TOYO Wa-Wa

2015年11月21日に第20回東洋英和女学院ハンドベルフェスティバルが開催され、東洋英和の11のハンドベルグループが天使のハーモニーを響かせました。参加者から寄せられた感想をご紹介します。

第20回ハンドベルフェスティバルに中高部OGチームで参加しました。

私とハンドベルとの出会いは、中学部に入学した1987年に遡ります。中1歓迎礼拝で聴いたハンドベルの音色に魅せられ、顧問の河野和雄先生と佐藤順子先生のご指導のもと、中高生時代ハンドベル部で活動しました。高等部3年生の時には、カナダで演奏する機会に恵まれ、この経験が卒業後20年以上経過した今も演奏活動を続けるきっかけとなりました。

今回のフェスティバルでは、複数のチームに分かれて演奏活動を続けている卒業生が久しぶりに集まって演奏しました。世代は離れていても、楓祭の公演に全てを注いだハンドベル部での活動が私たちの原点であり、言葉では表せない英和のつながりを感じました。20年の時を経て、多くの方に支えられ幼稚園、小学部、中学部、高等部、大学、お母様、お父様まで広がったハンドベルの輪がこれからも続くことを願っています。

鈴木　綾乃
高等部1993年卒／大学1997年卒

礼拝での各チーム代表者約70名とパイプオルガンによる前奏

●お便りお待ちしています！●
〒106-8507　港区六本木5-14-40　東洋英和女学院法人事務局総務企画部総務課　まで
E-mail：koho@toyoeiwa.ac.jp でもお待ちしております。

## 史料室レター No.18

### 軽井沢のコテージ

昨年八月一日、筆者は軽井沢ショー祭のアフタヌーン・トークにてお話をする機会を与えられました。そこで、夏休みに家に帰れない寄宿生を預かったミス・ブラックモアのブルックサイド・コテージのことを主に話題にしました。コテージの持ち主の変遷が最近明らかになったためです。そのコテージでは、かつて柳原燁子（白蓮）も夏休みを楽しく過ごしたと語っています。

ブルックサイド・コテージ
（1910年撮影）

旧ハミルトン&ハードコテージはその文化的価値と、オーナーご夫妻の保存へのご努力が評価され、国の登録有形文化財指定の告示が出されました。

軽井沢はカナダ人宣教師の足跡を知るためには欠かせない土地です。

（史料室　酒井　ふみよ）

史料室連絡先 ● TEL：03-3583-3166　FAX：03-3583-3329
E-mail：archive@toyoeiwa.ac.jp

# 英和☆星空探訪

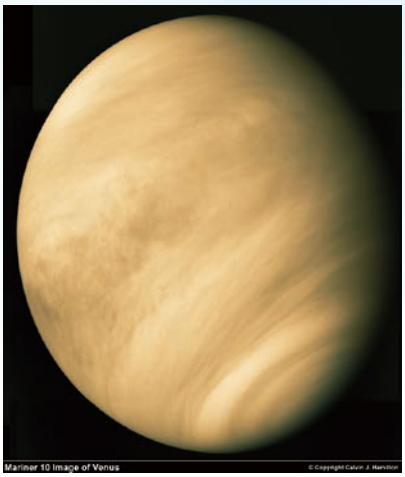
文・写真：北崎勝彦（高等部教頭）　題字・イラスト：北崎直子　Vol.12

## 金星

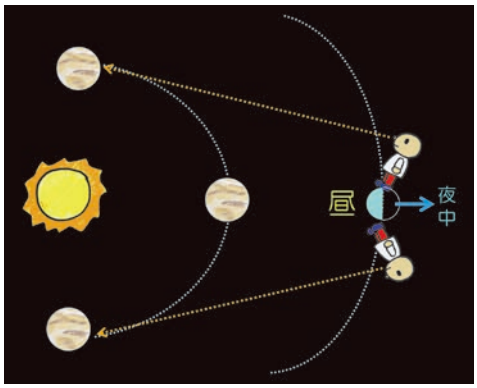
地球のすぐ内側を回っている金星は、大きさも構造も地球とよく似ています。固い地面と濃い大気がある惑星は太陽系ではこのふたつだけです。五〇年くらい前、金星は熱帯ジャングルのようなところで大型の動物や知的生命体もいるのではないかと想像されていました。しかし探査機が行ってみるとそこは全く違う世界でした。水はなく、地面の気温はオーブンよりも熱い四八〇度。そして大気圧は車も潰れてしまう九〇気圧。とても生物はいそうにありません。

ところが最近になり、かつては金星にも海があったとされる証拠が見つかりました。大昔は水もあり気温も気圧もずっと低かったようです。しかし金星にはバリアになる「磁場」がありません。そのため、水分は宇宙空間に逃げていき、海に溶け込んでいた二酸化炭素は大気中に放出され、究極の温暖化現象を起こしたと考えられています。金星は大気のほとんどが二酸化炭素です。地球でも二酸化炭素の増加による温暖化が懸念されていますが、それでも地球の二酸化炭素は大気の〇・一パーセントもありません。

この金星の大気を観測するために、二〇一五年一〇月現在、日本の探査機「あかつき」が金星に向かっています。成功すれば、この楓園七九号が発行される一月には、「あかつき」は金星を周回する軌道に乗っていて、金星の大気を三次元で調べる世界初の惑星気象衛星となっているはずです。「あかつき」による観測を通して、二酸化炭素がどのように惑星に作用するのか、更なる解明を期待したいと思います。



アメリカの探査機マリナー10号による金星の画像です。金星は地球に近い上に分厚い雲が太陽の光をよく反射するので、一段と明るく見える天体です。日本では古くから「明けの明星」「宵の明星」とも呼ばれてきました。　©NASA



金星は地球の内側を回っているので、夜中に高いところに見えているということはありません。日没後の西の空、夜明け前の東の空に見えます。

## 後援会より

### ● 2015年度後援会役員懇談会報告

10月9日(金)、後援会役員懇談会がANAインターコンチネンタルホテル東京で開催され、出席者数は学院側も含め約120名でした。学院各部を8つのグループに分けて分科会が行われ、英語教育、国際交流プログラム、クラブ活動、受験対策、就職活動などついて、後援会役員と教職員が有意義な意見交換を行いました。

小泉光人後援会会長の挨拶

全体会

高等部部門の分科会

## お知らせ

### 2016年3月卒業のみなさんへ

「楓園」は、年3回の発行のうち、9月号と1月号が「東洋英和楓の会」により同窓生全員に無料送付されます。また、学院ホームページに毎号掲載しますので、卒業後も是非読んでください！

東洋英和女学院 学院報　**楓園**　第79号

発行日：2016年1月29日
編　集：広報委員会
発　行：学校法人 東洋英和女学院　東京都港区六本木 5-14-40　Tel：03-3583-3325
メールアドレス：koho@toyoeiwa.ac.jp　　ホームページ：http://www.toyoeiwa.ac.jp

## 同窓会より

### ● 同窓会クリスマス礼拝報告　　2015年12月5日(土)

鳥居坂教会の野村牧師から「救い主の宿る所」との説教をいただき、大学オーケストラ部の演奏に導かれて「ハレルヤ」を全員で歌いクリスマス礼拝を守りました。今年はその後に同窓生で音大在学中の方々によるミニコンサートを楽しみました。

響きわたるオルガンの調べ、3人のソプラノ独唱そして作詞・作曲の「マリア」も歌われました。ハープも加わって共に歌った讃美歌「さやかに星はきらめき」に心ふるわせました。拍手鳴りやまず、アンコールで出演者8人全員によるクリスマス讃美歌メドレーで幕となりました。集会室でのお茶の会では伝統のお手製フルーツケーキを味わい、豊かな賜物に身も心も満たされたひと時となりました。

野村稔牧師

大学オーケストラ部の奉奏

クリスマス・ミニコンサート